

〔墨の彩り展によせて〕

趙令穰と北宋士大夫の小さな書齋

趙令穰「秋塘図」(大和文華館、図4)は、宋代絵画を代表する名品の一つです。手前に水面が広がり、枯木と煙霞のかかった針葉樹が、微妙な光の下に描かれています。重要なのは近景へのまなざしです。それまでの北宋の大観的な絵画(次頁図4)とは違い、「秋塘図」ではあたかも風景が観者の心をつつみ込むかのような、やさしい画面が構成されています。

趙令穰は北宋皇室の一員で、太祖五世の孫です。今回は北宋社会において、皇帝を中心とする宮廷と、士大夫と呼ばれる、新しい科挙官僚たちが、互いに浸透し、深く関係を持つことで、その文化を形成していくことを、趙令穰を例に考えてみたいと思います。

北宋の宮廷は、建国以来多くの文物を全国に集め、それは三館秘閣六閣と呼ばれる収蔵機関におさめていました。北宋宮廷は中央東西を貫く横街を中心に、手前が外朝とよばれる政治空間、後方が内朝と呼ばれる皇帝たちの日常空間になっていました。秘閣は外朝の正面、図1のAの場所にありました。秘閣がこのような政治空間の中心におかれたのは、宋朝にとって文物の収蔵と公開が高い政治的意図を持っていたからです。宋代宮廷では文物が、定期的に公開され

ることによって、宋朝の文化的権威を群臣に示していました。そのため、文物を公開する空間は、いずれも権威を誇示するかのような立派な高層の建物が建てられました(図2)。

ところが北宋末の徽宗皇帝は宣和殿という、自分のお気に入りの芸術品を楽しむ空間を作り上げます。注目すべきはその場所です。宣和殿は図1のBの場所にありました。宣和殿は、それが内朝の最もプライベートな場所にあること、周りを園林に囲まれていたこと、そして建物が小さいことに特徴があります。それまで外朝にあった秘閣のようなパブリックな文物鑑賞空間とは大きく異なるものだったのです。

このような徽宗に影響を与えたと思われるのが、当時士大夫たちに流行していた、芸術品の収蔵と鑑賞、そしてそのための空間を作り上げることです。例えば王詵は宝絵堂、米芾は宝晋齋、薛紹彭は清閨閣といった自身の収蔵品をおさめ、また鑑賞する空間を作っていました。宝絵堂には多くの晋唐名画が集められ(蘇軾「王詵都尉宝絵堂詞」)、清閨閣は君子の象徴ともされた松竹に囲まれた閑適な鑑賞空間を形成していました(薛紹彭「清閨閣詩帖」)。また同時に北宋には、士大夫たちが邸宅に園林を

作ることが流行し、それは「三分水、二分竹、一分屋」とよばれるように、園林のなかに建物が点在するものでした(図3)。今、徽宗の建てた宣和殿を見てみると、南には瑤林、北には玉宇とよばれる洞や環碧という池があり、また両端に臨漪、華渚亭、泉の流れる池には太湖石を積んだ山が臨み、雲華殿、太寧閣があって左右から登られて散策でき、途中には琳霄、會春等の亭があったとされます(蔡京「太清樓特宴記」)。それがこのような士大夫たちの園林と共通する構成を持っていることは言うまでもないでしょう。

徽宗という皇帝としてのイメージが強いですが、実は神宗の第十一皇子として誕生しました。そのため若い頃は趙令穰や王詵と交友を深め、書は最新流行の書体であった黄庭堅を学んでいたのです(蔡絛「鐵圍山叢談」)。後に皇太后向氏と当時の政治バランスによって若くして皇帝に擁立されるまで、徽宗は北宋士大夫と類似する文化生活を送ったと言えるでしょう。即位後の徽宗は最新の士大夫文化を取り入れ、芸術を鑑賞する小空間として宣和殿を建てたのではないのでしょうか。それは徽宗が、青銅器や晋唐書画といった、当時の士大夫たちの嗜好に合う文物を同じように集めていることにも窺われます。

趙令穰「秋塘図」には、北宋中期に朝廷外朝の空間を飾った郭熙らの厳しい山水ではなく、復古的な着色と水墨を並立した表現がみられます。この背景には、当時の士大夫たちが収集した、晋唐書画を実見した経験

も反映されていることも指摘されています。そしてその近視的な画面構成と清雅な画趣には、当時士大夫たちが作り上げていた、閑適な芸術空間での鑑賞の嗜好も影響しているのではないかと思います。

趙令穰は太祖の次子德芳、秦王房に属します(図5)。宋室は太祖弟の太宗の家系へと引き継がれますが、南宋二代皇帝の孝宗は、同じ秦王房から出ました。趙令穰は皇帝にはなりませんが、もし皇帝になっていたら、やはり彼も徽宗のような芸術皇帝になっていたでしょう。皇帝や皇族に芸術に長けた人物が多く輩出するのは、他の時代にはない宋代の際立った特徴です。その背後には、士大夫と皇族、そして皇帝が、流動的に、かつ文化を深く共有する北宋社会のあり方がありました。書画を身につけることは、士大夫政治を行うための重要な工具だったのです。徽宗と趙令穰の関係からは、皇帝・皇族と士大夫たちが作り上げる北宋文化と、美術と政治の密接な関係が垣間見えるようです。(塚本磨充)

(図2は『故宮書画図録』17國立故宮博物院、図3は『中国古代建築史』第3巻、中国建築工業出版社、より転載させていただきましました。)

図5 趙令穰関係系図

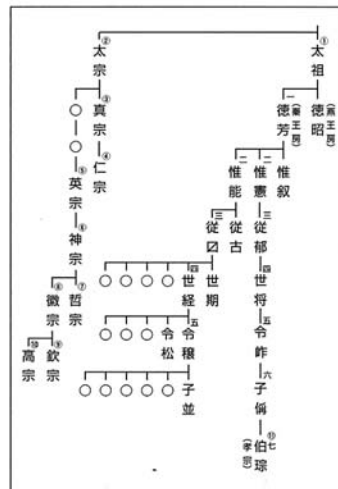


図1 北宋の宮城(元刊本『事林廣記』)

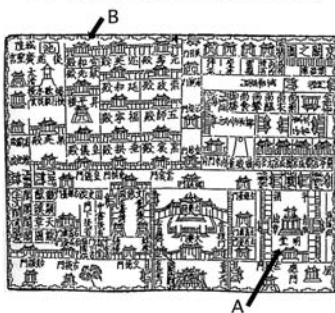


図2 太清樓での観書(『景德四図』台北・故宮博物院)



図3 富鄭公園図

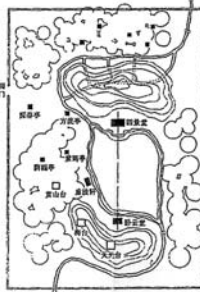


図4 秋塘図(大和文華館)



季刊 美のたより No.158

平成19年4月1日

発行 大和文華館